

II 執筆要領

1. 投稿原稿に使用する言語は日本語とします。ただし、依頼原稿については、編集委員会の判断により、他言語の使用を認めることがあります。
2. 投稿論文の枚数は、図・表、注・文献等を含めて、22,000 字以内です。研究ノートは、図・表、注・文献等を含めて、12,000 字以内です。
3. 原稿の投稿は以下のアドレスにて添付メールで受け付けます (jjosshensyu@gmail.com)。投稿原稿は、ワードで作成したデータ、及びその原稿を PDF 化したデータの両方を送ってください。さらに「投稿前チェックリスト」も、確認のうえ添付してください。なお、原稿作成に当たっては、以下の「4.」以下すべての要領を守ってください(投稿に当たっては、学会ホームページ (<http://www.jsss.jp/>) でご確認ください)。
4. 原稿は、全て横書きとします。A4 判縦置きで全角 40 字 40 行 (但し、欧文綴り及び数値は半角) で作成して下さい。
5. 原稿には表紙を必ず付け、その表紙に原稿の種類、タイトル(サブタイトル)、執筆者名、執筆者肩書、連絡先を記入してください。表紙は、「表紙」としてタイトルをつけて別ファイルで保存してください。
6. 本原稿は、はじめに邦文・英文の抄録を作成して下さい。1 枚目に邦文タイトル (サブタイトル)、邦文 800 字以内の抄録、邦語による 3~5 のキーワードを記載、2 枚目には英文タイトル (サブタイトル)、英文 250 語以内の Abstract、英語によるキーワード 3~5 を記載してください。
7. 本原稿は、抄録に続けて 3 枚目以降が本文です。論文のレイアウトとして、A4 用紙に「40 字×40 行」とし、ページ番号 (ページの下部・中心)、および行番号もつけてください。論文本文は、抄録の後、3 枚目を 1 頁目として「14 頁以内 (図表スペースも含めて)」に納めて下さい。本文だけではなく「注」「文献」もこの中に含めて下さい。「研究ノート」の場合は「7.5 頁以内 (図表スペースも含めて)」とします。「注」「文献」の形式については、下記 12 を熟読のこと。
8. 図表については、『スポーツ社会学研究』(B5 版) 掲載を想定し、「仕上がり」のサイズで別に作成して下さい。その原稿を『スポーツ社会学研究』本文の文字組にあてはめ、必要とする「文字数」を確認し、本文で規定している文字数からその図表使用分の文字数を減らして原稿を作成して下さい。頁あたり 1/4 以下相当は 400 字、1/2 以下相当は 800 字、1 頁相当は 1,600 字が大体の目安です。
9. 図表が入る位置については、本文中の該当箇所に「※図○、表○入る」と指定してください。文字量の判断に関わりますので、図表分スペースを最初から本文中に「空ける」事はしないようにして下さい。なお、図表のタイトルは、図の場合は下、表の場合は上につけます。
10. 公平な審査を期するため、謝辞および付記等は掲載可の判断が通知され、著者校正を行う時点で書き加えることとします。また著者校正終了後、「受付日 (論部の受理・審査に入ることが決定した日)」「受理日 (掲載が決定し完成原稿の受理が確認された日)」を編集委員会により論文末に記載するものとします。
11. 学会誌への投稿論文は未発表のものに限られます。既発表の論文と著しく内容が重複する論文を投稿することは「二重投稿」として「日本スポーツ社会学会倫理規程」により禁じられています。すでに

公刊されている論文と相当程度内容が重複する論文を投稿する場合には、(1)これら既発表論文すべてのコピー、(2)既発表論文と投稿論文との関係（特に投稿論文の議論の中心部分が既発表論文と重複していないこと、および投稿論文の議論の新規性）を説明した文書、を投稿時に編集委員会宛に添付してください（書式自由）。査読に先立ち編集委員会において「二重投稿」にあたらぬかどうかを検討します。

12. 引用文献の記述の形式は、以下とします。（以下はすべて改正されたものです）

(1) 本文中の注番号は、該当箇所の右肩に 1) 2) 3) で表示します。

(2) 引用文献、および Web ページの引用については、下記のスタイルに従ってください。

(2-1) 本文の該当箇所に、下記の情報を挿入する。

挿入の際は、文献注のカッコは全角の丸カッコ（ ）を用いることとし、（著者名 出版年）のかたちで表記する。著者名と出版年のあいだにはかならず半角のスペースを入れる。

文献注には、著者名は姓だけを記載する。ただし、ひとつの論文のなかで参照する文献に同姓の著者が複数いる場合には、文献注の著者名は、漢字表記であれば氏名すべて、アルファベット表記であれば、ラストネーム、イニシャルとする。

文献からの引用をおこなった場合には、（著者名 出版年: 引用ページ数）のかたちでかならず引用ページを明記しなければならない。引用ページ数は数字のみを記載し、xx 頁とか pp. xx-yy とは書かない。この場合、出版年とページ数のあいだは半角コロンと半角スペースでつなぐ。

- ・邦文のもの （著者名 出版年: 引用ページ数）と示す。
- ・外国語のもの 当該言語にて（著者名 出版年: 引用ページ数）と示す。
- ・外国語文献の翻訳のもの （原著者名 原書の出版年=訳書の出版年: 引用ページ数）ないし、（原著者名 原書の出版年: 引用ページ数=翻訳発行年: 引用ページ数）と示す。原書と訳書は、半角イコールでつなぐこととする。
- ・翻訳だが、原著を示す必要がないと判断するもの （著者名(カタカナ) 翻訳本の発行年）と示す。
- ・Web のもの （執筆者ないし Web 団体名 西暦発行年）と示す。

【例】

(多木 1995: 81)

(Cantin-Brault 2015: 55)

(Csikzentmihalyi 1990=1961: 55)

(エンデ 2005)

(Farhad and Slobodian 2012)

(池井 2013: 70)

(菊 2011: 25)

(Manzenreiter 2013: 60)

(Mead 1967: 152=1973: 164)

(文部科学省 2021)

(多木 1995: 42)

(2-2) 文献については、下記に従って示してください。

<文献の一覧のしかた>

文献は著者のアルファベット順に並べる。同じ年に発行された同じ著者の文献が複数ある場合には、「2015a」「2015b」のように、発行年の後にアルファベットを付けて区別する。論文または分担執筆の場合は掲載頁を示すこととする。

<邦文文献のもの>

邦文の文献の記載にあたっては、出版年と巻号およびページの数字と一部のカッコ記号を入力する以外は、カンマ、ピリオドも全角文字で入力する。出版年が不明な場合は、出版年の代わりに n.d.と記載する (n.d.は no date の略語である)。サブタイトルは「— (ダッシュ)」で囲う。

書籍の場合

著者名, 西暦発行年, 『書名—サブタイトル—』 出版社.

書籍に含まれる論文の場合

著者名, 西暦発行年, 「論文タイトル—サブタイトル—」, 書籍の編著者名, 『書名—サブタイトル—』 出版社, 論文掲載頁.

雑誌掲載論文の場合

著者名, 西暦発行年, 「論文タイトル—サブタイトル—」, 『ジャーナル名』 巻の数字 () 内に号の数字, 論文掲載頁.

<外国語文献のもの>

外国語文献の記載にあたっては、すべて半角文字で入力すること。出版年が不明な場合は、出版年の代わりに n.d.と記載する (n.d.は no date の略語である)。著者名は、単著者の場合はフルネーム、著者が複数いる場合は、イニシャルの記載とする。なお、タイトルやサブタイトルの冒頭の冠詞および、タイトルのなかにある名詞の最初のアルファベットは大文字にすること。サブタイトルは半角コロンで続けることとする。

書籍の場合

著者名,西暦発行年,書名:サブタイトル (イタリック体),出版社.

書籍に含まれる論文の場合

著者名,西暦発行年,“論文名 (“”でくくる):サブタイトル”,書籍の編著者名,書名:サブタイトル (イタリック体),出版社.論文掲載頁.

雑誌掲載論文の場合

著者名,西暦発行年,“論文名 (“”でくくる):サブタイトル”,ジャーナル名 (イタリック体),号数,論文掲載頁.

<外国語文献の翻訳があるもの>

原著者名, 西暦発行年, 原書名 (イタリック体), 出版社, (翻訳者名, 翻訳出版年, 『訳書書名』 出版社.)

<原著を示す必要のない翻訳のもの>

著者名 (カタカナ), 翻訳出版年, 翻訳者名, 『翻訳書名』 出版社.

<Web 頁のもの>

基本的に文献の記載形式に準じることとする。

著者ないし団体名, 西暦発行年, 「論考タイトル」 Web タイトル, 取得年月日, URL

外国語の場合は、著者ないし団体名、西暦発行年、“論考タイトル”Web タイトル、Retrieved～年月日、URL

【例】

Cantin-Brault, Antoine, 2015, “The Reification of Skateboarding”, *International Journal of Science Culture and Sport*, 3(1), 54-66.

Csikzentmihalyi, Mihaly, 1990, *Flow: The Psychology of Optimal Experience*, Harper and Row. (今村浩明訳, 1961, 『フロー体験—喜びの現象学—』, 世界思想社.)

エンデ, M., 2005, 大島かおり訳, 『モモ』, 岩波少年新書.

Farhad, N. and Slobodian, N., 2012, “The CSR Strategies of the MNCs to Ensure the Labor Rights of Migrant Workers: The 2022 FIFA World Cup Project in Qatar (The Case Study Based on Migrant Workers of Bangladesh)”, *Report from the Department of Management and Engineering*, Linköping University. Retrieved December 12, 2006, <http://liu.diva-portal.org/smash/get/diva2:544804/FULLTEXT01.pdf>

池井望, 2013, 「スポーツというフィクション」, 日本スポーツ社会学会編, 『21世紀のスポーツ社会学』, 創文企画, 66-83.

菊幸一, 2011, 「スポーツ社会学における歴史社会学の可能性」, 『スポーツ社会学研究』 19(1), 21-38.

Manzenreiter, Wolfram, 2013, *Sport and Body Politics in Japan*, Routledge.

Mead, George Herbert, 1967, *Mind, Self & Society*, The University of Chicago Press. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳, 1973, 『現代社会学体系 10 ミード—精神・自我・社会—』 青木書店.)

文部科学省, 2021, 「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」, 2022年8月16日取得, https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf

多木浩二, 1995, 『スポーツを考える—身体・資本・ナショナリズム—』, 筑摩書房.

トンプソンリー, 2008, 「日本のスポーツメディアに見られる人種言説」, 『スポーツ社会学研究』 16, 21-36.

以上。